

<<紀ノ川 (きのかわ)>>

图书基本信息

书名：<<紀ノ川 (きのかわ)>>

13位ISBN编号：9784101132013

10位ISBN编号：4101132011

出版时间：1964-6-30

出版时间：新潮社

作者：「日」有吉佐和子

版权说明：本站所提供下载的PDF图书仅提供预览和简介，请支持正版图书。

更多资源请访问：<http://www.tushu007.com>

<<紀ノ川(きのかわ)>>

内容概要

紀ノ川の上流、九度山村で一番の美貌を謳われた花は、育ててくれた祖母が決めた男：真谷敬策の元へ豪華な道具とともに嫁いで行く。

義弟の浩策とのいざこざはあったものの、舅姑に孝養を尽くし、夫を支え、家を守り、子を育てる。夫は祖母の見込み通り、花の期待通り出世し、多少の浮気などの問題はあるが、和歌山県政界の第一人者になって行く。

長男の政一郎は、父の期待も空しく、おとなしく育ち、長女の文緒は、古風な躰を施そうとする花にことごとく反抗して育つが、妹弟の面倒見はよい。

二人は東京の学校へ進学し、文緒は周囲の気配りで良縁を得て、親掛かりの幸せな結婚生活をスタートさせる。

間もなく一子を得る。

文緒は夫の転勤に伴い、上海へ渡り、次男を産むが、幼くして死なせてしまう。

時を同じくして、嫁いで間もない花の末娘：歌絵が肺炎で急死する。

さすがの花もショックで倒れてしまう。

再び妊娠した文緒は、夫のニューヨークへの転勤には同行せず、実家に戻ってくる。

子供を失って気弱になっている文緒は、以前は断固否定していた神仏や占いにも頼る気になり、生まれた子供の名前は姓名判断で、華子と決まった。

文緒の4度目の出産に伴い、6年ぶりに和歌山に戻った華子は、すっかり季節感のわからない子に育ってしまっていた。

しかし母親に似ず、古いものに対して反抗的ではないので、花をほっとさせる。

そんな折、仕事で上京していた敬策が急逝する。

葬儀を終え、和歌山市内の邸をたたみ、古くからの在所へ戻った花は、これまで夫に注ぎ込んでいた情熱のやり場を失い、楽しみは孫の華子からの手紙のみになってしまう。

戦争が本格的になり、運良く帰国することになった文緒一家であったが、予想以上に長引く戦争に危険を感じ、子供たちを和歌山へ疎開させることにする。

和歌山での生活は、祖母の叱咤激励もあって、華子の体を健康にしてゆく。

終戦後、しばらくして東京へ引き上げていった華子たちは、着る物を食べ物に変えるという窮乏生活を余儀なくされ、彼女の父はそんな中で急逝する。

一方、花は浩策から借りる本を読む毎日を過ごしていたが、華子が就職してしばらくたった頃、脳溢血で倒れてしまう。

見舞いに訪れた華子に、錯乱した花はあたかも文緒が枕もとに居るかのごとく、半生を述懐する。いつでもその時のその立場で一生懸命やって来て、跡取の長男に期待できないことがわかってきたら心細くなったし、文緒にそばにいてほしかったが、農地解放があって、どうにも昔通りの豪勢な家には戻せないのだとはっきりしたら、気がかりがなくなって心が晴れ晴れとしたと言う。

そうこうするうち、来る予定ではなかった文緒がやって来たので、華子は東京へ戻ることにする。

帰りがけに寄った和歌山城から紀ノ川を、そしてその先の海を、華子はいつまでも眺めていた。

<<紀ノ川 (きのかわ)>>

<<紀ノ川(きのかわ)>>

作者简介

有吉佐和子（1931-1984），和歌山生れ。

東京女子大短大卒。

1956（昭和31）年「地唄」が芥川賞候補となり文壇に登場。

代表作に、紀州を舞台にした年代記『紀ノ川』『有田川』『日高川』の三部作、一外科医のために献身する嫁姑の葛藤を描く『華岡青洲の妻』（女流文学賞）、老年問題の先鞭をつけた『恍惚の人』、公害問題を取り上げて世評を博した『複合汚染』など。

理知的な視点と旺盛な好奇心で多彩な小説世界を開花させた。

<<紀ノ川 (きのかわ)>>

版权说明

本站所提供下载的PDF图书仅提供预览和简介, 请支持正版图书。

更多资源请访问:<http://www.tushu007.com>